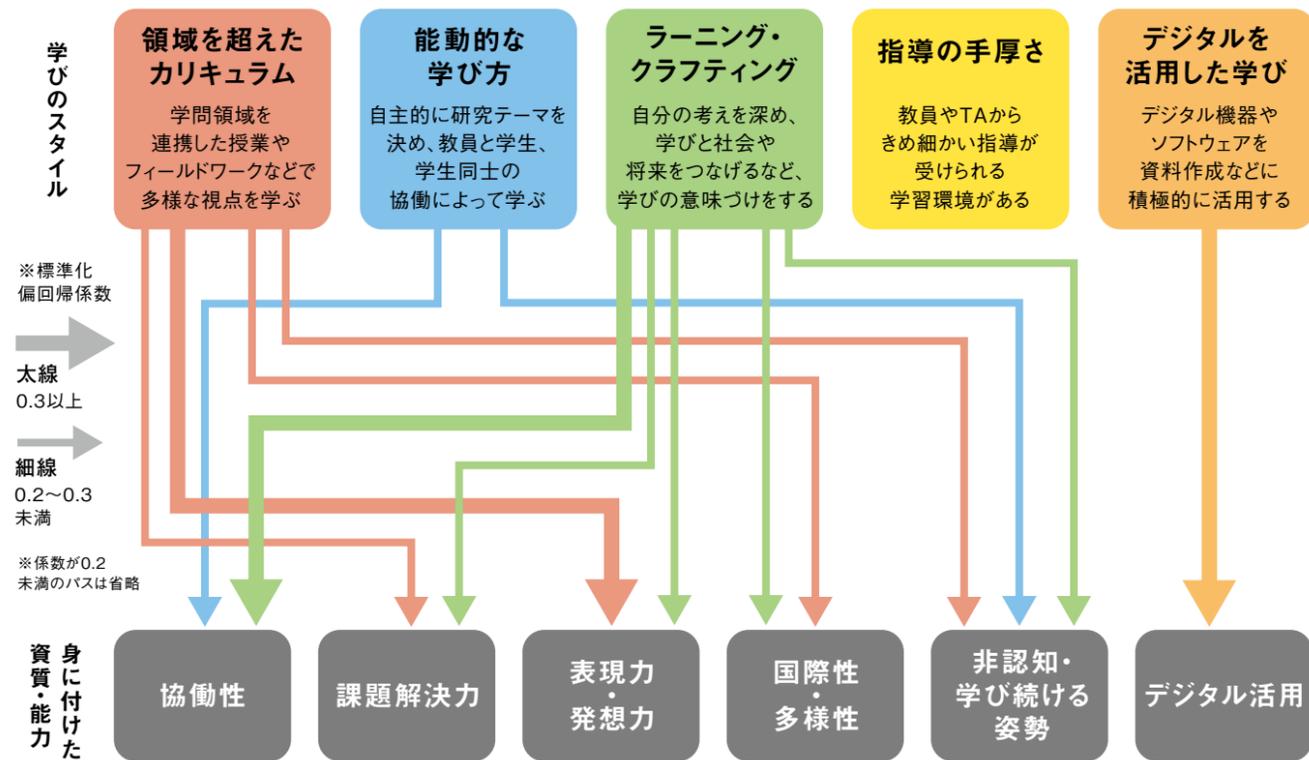


【図表4】「学びのスタイル」と「身に付けた資質・能力」の関係



「若年就業者のウェルビーイングと学びに関する定量調査」
 調査主体：パーソル総合研究所・ベネッセコーポレーション・中原淳（ハチタからの「学びと幸せ」探究ラボ） 調査時期：2021年11月5日～11月8日 調査対象者：有期雇用を除く25～35歳の就労者2,000人
 ＊カイ2乗値：82.614 (df=13, p=0.000) GFI=0.993, CFI=0.996, RMSEA=0.052 ＊パスの数値は標準化回帰係数、共分散、誤差間共分散を省略している

な人生を歩む人を増やす入試、すなわち、自学や社会で成長、活躍するポテンシャルを測る入試です。われわれの^{＊2}調査で、社会で幸せに活躍している（「ウェルビーイング」）人は、その状況を獲得してきた背景に、高校・大学時代の学び方が関与していたことが明らかになっていきます。中でも、高校時代の探究的な学びは大きな要素です。大学は、高校が育てた「幸せの素養」をより大きく育てるために、まずは高校の探究の状況を知るべきでしょう。そのうえで、入試で探究の経験や成果を問い、成長ポテンシャルの高い学生を入学させる^{＊3}施策は、これまで以上に重要になります。

同じ調査で、学生時代の学びのスタイルと、身に付けた資質・能力の関連を調べたものが【図表4】です。「指導の手厚さ」の資質・能力獲得への関与度合いが意外にも弱いですが、手厚い指導は今や前提条件であり、それだけでは差がつかないでしょう。関与度が強いのは、「領域を超えたカリキュラム」や「ラーニング・クラフティング」です。前者は探究的な学び、後者は教育目標の理解と重なりが多い項目です。自学の教育にこれらを取り込むだけでなく、高校までにこれらを経験した生徒を入試で選

ぶことによって、入学後のより大きな成長が期待できると言えます。これらのポテンシャルを測るには、高校までの経験を丁寧に見る必要があります、そのためには高校と対話を重ね、適切な測り方を探っていく必要があります。特に年内入試は本来、そうした丁寧な評価を行う手法であったはずですが、もちろん一般入試でも活動報告書や志望理由書を書かせるなど、工夫次第で評価は可能でしょう。

今でも手いっぱいなのに、そんな余力はないという大学も多いかもしれません。ただ、現在私立大学の懸念事項となっている「定員管理」については、国が見直しを議論するだけでなく、^{＊4}経済界も緩和を提言しています。この方向で見直しが行われた場合、これまで定員管理に割っていたリソースをデータの取得や分析に振り向け、「現在の各入試でどんな学生が獲得できていて、どう育っているのか」「今後、どういう入試でどんな学生を募集するのか」の検討に割くことも可能になるはずですが、新学習指導要領が施行されると、今後高校で育つ資質・能力に変化が生じてくるでしょう。大学には、伸ばしたい資質・能力、育てたい人材と選抜方法を、いかに一致させるかが問われます。

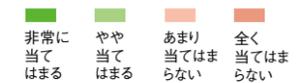
＊2 本誌2022年3-4月号P.5【図表5】 ＊3 すでに実施されている探究型入試の事例は、本誌2021年11-12月号P.16～17参照 ＊4（一社）日本経済団体連合会「提言「新しい時代」に対応した大学教育改革の推進—主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて—」（2022年1月）

【図表1】入試区別思考力（大学1年生）



【図表2】入試区別教育目標への理解（大学1年生）

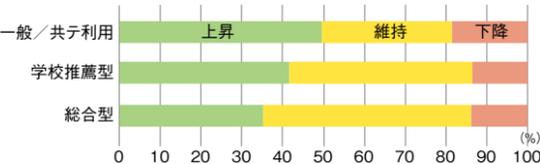
「所属する学部・学科の教育目標（どのような人材の育成をめざしているか）を知っている」



【図表3】思考力の変化と入試区分（大学1年次→3年次の変化）

【図表1】は、「思考力」と入試区分との関係です。問題解決の質と深さに関わる「思考力」が大学の学びを支える力と考えると、入試難易度が高いほど、また年内入試より一般入試のほうが思考力が高く、大学入試でよく語られるイメージに沿った結果が見取れます。

【図表2】は、学生が自学の教育目標をどこまで理解しているか、入試区分ごとに見たものです。年内入試入学者は、受験用の書類や面接の準備を通じてか、高い理解度を示す一方、一般入試入学者は相対的に理解度が低く、教育目標をよく知らぬまま入学する者が2割近くいます。この傾向に入試



難易度による差はなく、全ての大学共通の課題と言えるでしょう。【図表3】は、大学1年次から3年次にかけての思考力の伸びを入試区分別に見たもの。一般入試入学者の方が、「上昇」の割合が高いという結果です。入学時の高い思考力が、入学後の成長の下支えになっていると考えられます。ただし、年内入試入学者も教育目標への理解度は高いので、入学後の早い段階で基礎学力を身に付けられれば、さらなる成長が期待できるでしょう。なお、一般入試入学者には「下降」した人も少なからずいます。高い学力や思考力を活用しないまま進級したのであれば、自校教育など、目的意識の強化が効果を上げる可能性があります。

高校での学びを見て成長ポテンシャルを測る

入試方式別の入学者の特性をふまえて今回ご提案するのは、幸せ

＊1 私立大学の一般入試と年内入試の入学者比率は、2000年度から2020年度にかけて、およそ6：4から4：6に逆転した

OPINION

入学後に成長する学生を見抜くための入試とは



ベネッセ文教総研
主任研究員
村山 和生
むらやまかずお ●ベネッセコーポレーションにて、ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室シニアコンサルタント、「VIEW21」大学版（現在は「Between」に統合）編集長、一般財団法人大学IR総研副事務局長（兼務）などを歴任。2021年からベネッセ文教総研の主任研究員として、高等教育領域を中心に「学修成果の可視化」「IR」等について調査・研究、および情報発信している。

取材・文/ 見山雄介 撮影/ 亀井宏昭